

「市民指導マニュアル 第2章(要援護者の垂直避難)」

ホームページ掲載にあたって

この「市民指導マニュアル」は、防災福祉コミュニティの防災訓練等の指導・支援を担当する消防職員に必要な防災知識や、地域での「自助」「共助」を促し、地域防災力の向上に繋げることを目的に作成しました。

消防職員向けの内部資料として作成したマニュアルですので、全てを公開することはできかねますが、第2章(要援護者の垂直避難)については、日常の防災訓練等で地域住民の方々にもご活用いただきたい内容が掲載されています。

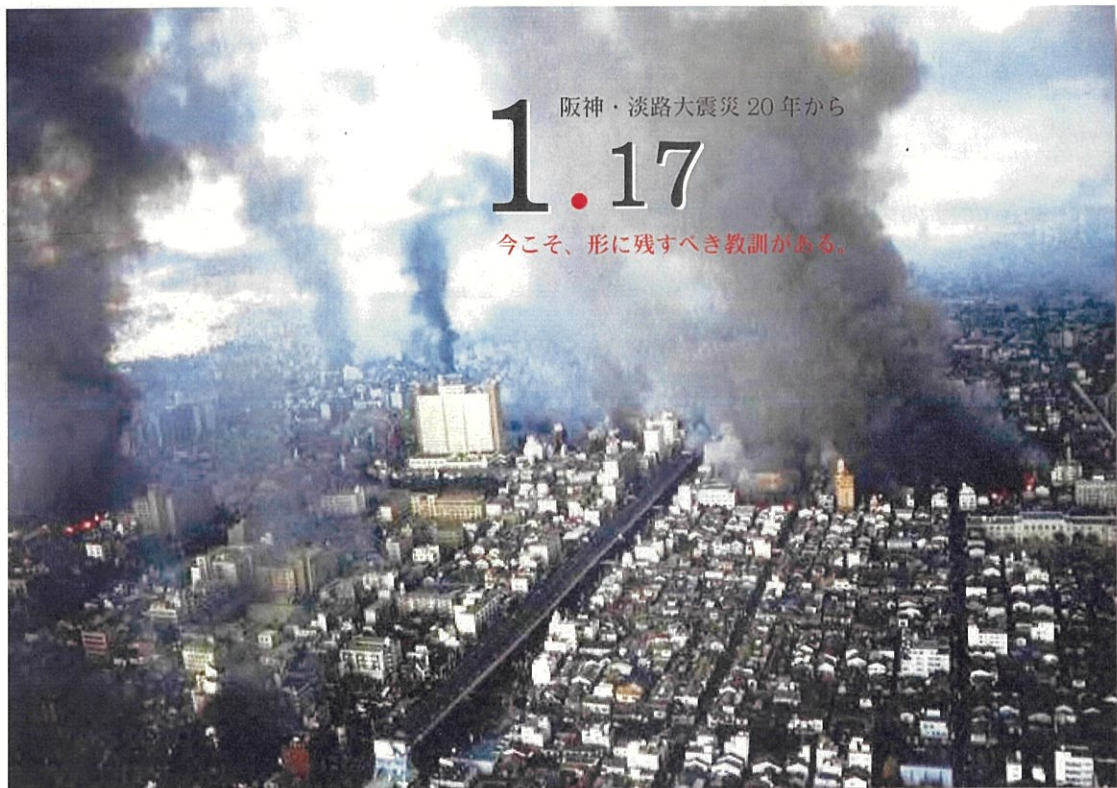
つきましては、このたび神戸市消防局が作成しました「市民指導マニュアル」の中から『第2章(要援護者の垂直避難)』を抜粋し、ホームページにて公開いたしますので、防災福祉コミュニティの訓練等の機会にご活用ください。

なお、当マニュアルに記載されている災害時要援護者の緊急待避支援の方法はあくまでも緊急時を想定したものであり、各資機材ならびに身近な道具を使用している搬送方法については本来の用途ではない使用方法を掲載している項目もありますので、訓練時は必ず安全管理員を確保する等、けがのないように十分注意してください。また、決して無理をせず、要援護者もしくは支援者自身が不可能と判断すれば別の搬送方法を選択するなど、身の安全を最優先にして防災訓練に取り組んでいただきますようよろしくお願いいたします。

神戸市消防局予防部予防課

神戸発の自主防災組織

防災福祉コミュニティ 市民指導マニュアル



平成 26 年

神戸市消防局

はじめに



平成7年1月17日5時46分、阪神・淡路大震災が発生し、6,434名（行方不明者2名、市外含む）の尊い命が奪われました。神戸市内で54件の火災がほぼ同時に発生し、地震により、消火栓も水道管の破損によって多くが機能しない状況の中、神戸市消防局のポンプ車38台で対応しなければいけませんでした。

被災地全体で35,000人が一時的に倒壊家屋の下敷きになったと推定されていますが、そのうち消防や警察によって救助された方が22.5%、市民によって救出された方が77.5%とされています。

また、平成26年2月に兵庫県が公表した南海トラフ巨大地震の被害想定では、神戸市においても最大震度6強という大きな揺れとともに、3.9mの津波が来襲すると想定されています。

このような大規模災害時において、公助の力だけで災害対応することは困難であり、地域の自主防災力も大変重要となります。

本書では、地域の自主防災組織である防災福祉コミュニティへの支援指導が中心となっておりますが、特に要援護者の方への対応を盛り込んでおり、要援護者の緊急退避支援の方法など、これまで消防職員が市民の方に指導する機会が少なかった訓練項目ですが、日頃の現場活動にも活用できる内容になっています。

本書で基本的な理論・実践の指導方法を学んでいただき、大規模災害時に我々が直ぐに駆けつけることが難しい現場においても「市民の生命を守る」という消防の任務を達成するため、実践を通して新たな方法や手法を地域とともに考え、地域防災力の向上に取り組んで下さい。

第2章

要援護者の垂直避難

要援護者の搬送や移動の方法、かかわり方は、さまざまな方法があります。
大きく分けると、

- ① 津波からの避難などの【緊急退避】
- ② 家に住めない状態になったための【生活するための避難所への移動】
- ③ 避難所内での移動
- ④ 要援護者との接し方

②や③は、例えば多少遅くなっても、「即」命に危険が及ぶことは稀です。

しかし、①津波からの【緊急退避】に時間を要すれば、要援護者本人のみならず、支援者も危険にさらされることとなります。

したがって、この項目では、①津波からの【緊急退避】に最大の重点をおいて解説します。

津波からの緊急退避について、

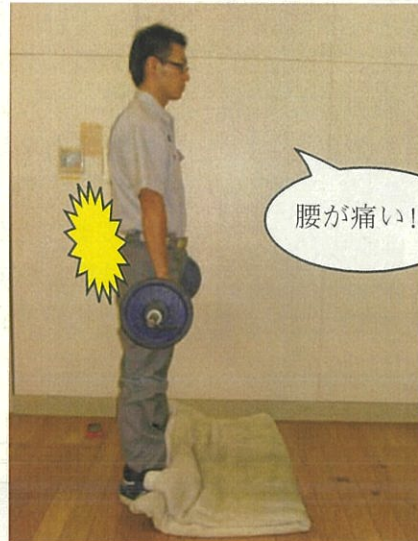
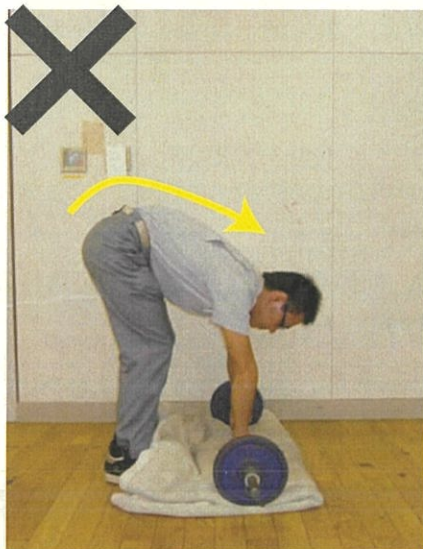
- 1 起き上がれない人を起こすボディメカニクス
- 2 垂直避難
- 3 視覚障害聴覚障害の方の誘導について順番に解説します。



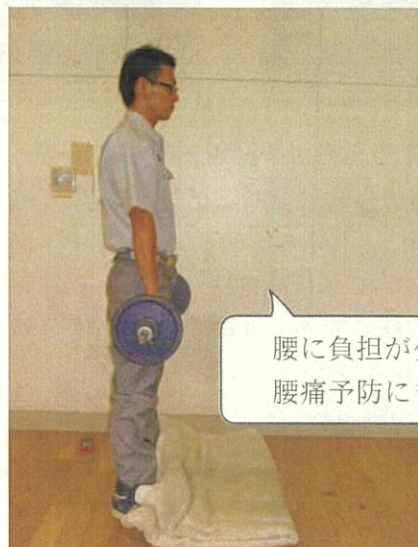
支援者の負担の少ない要援護者の移動方法

1 姿勢

普段から床の物を持ち上げる際、腰に負担のかかる取り方をしていませんか？
軽い物なら大丈夫ですが重い物を取る時、この方法だと腰への負担が大きいです。
このような方法を続けていると腰痛を発症するリスクが大きくなります。
そうならない様にする為には正しい姿勢で持ち上げることを心がけましょう！！



※腰が曲がっていると腰への負担が大きいため注意すること。



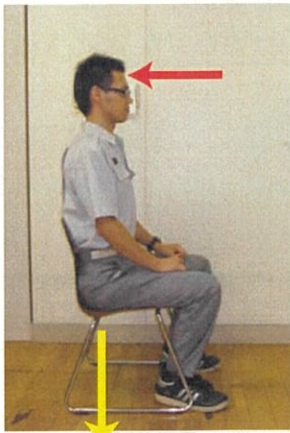
☆ポイント☆

背筋を伸ばしてお尻を突き出す様な姿勢で、太ももの筋肉を使い持ち上げる。

2 座った状態から立たせる介助方法（自力で立位ができる人限定）

(1) 自力で椅子から立てない人を介助して立たせる方法

人はこの姿勢の状態から上に立ち上がることはできるでしょうか？



重心

一度立てるか試してみましょう・・・

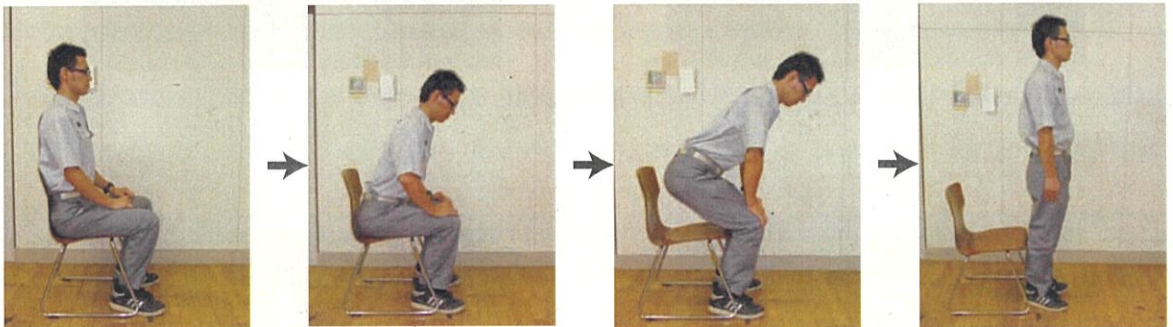
座っている人の赤矢印部分を人差し指で押さえて前傾姿勢にならない様にしてください。

さあ立ちましょう・・・・・・・・・・

立てましたか？立てないでしょう！！

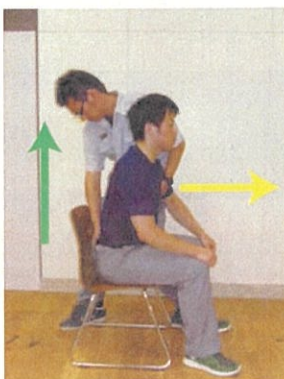
実は重心が後方にあるので、前傾姿勢にならないと立てないのです。この状態で立つことは物理的に不可能です。

・人が椅子から立つ動きは下の様になります。

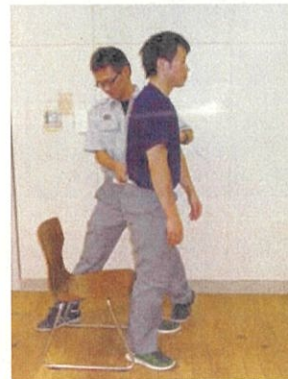


・この動作のメカニズムを利用してボディメカニクスと応用すると、介助する側、される側、双方に負担が少なく立つことができます。コツとしては特に前傾姿勢にさせることが重要なのです。

介助者は右手でベルトを持ち、左手で脇を持ちます。右手は上方向に左手は手前方向に力をいれます。この様にすると介助する側の負担が少なく実施できます。



【後ろ】
ベルトを掴む。
ベルトがない場合はズボンを掴む。



【正面】
脇を通して二の腕を掴む。

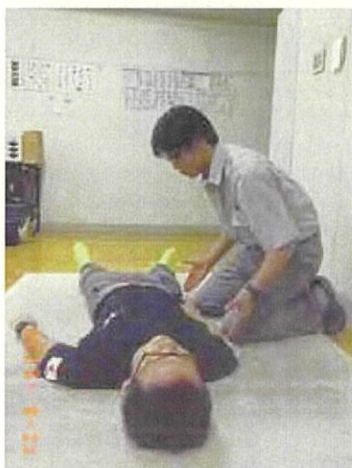
ベルトに加重をかけすぎるとズボンが破れる可能性がある
ので注意すること！



3 仰向けから横に向ける方法（仰臥位から側臥位）

※仰臥位＝仰向け、側臥位＝横向き

- (1) 仰臥位でいる人の側面に位置する→両腕を前で組ませる。
- ・基本左右どちらでも良いが足に麻痺がある場合は麻痺足側に位置する。
 - ・腕を組ますことにより小さく体をまとめる。



片手に麻痺がある場合は
健康な手で保持してもらおう。



声かけを忘れずに！！

(2) 左膝を立てる。

健足（麻痺がない足）である場合など、自力で膝立てできる人には自力でしてもらおう。



☆ポイント☆

初めに軽く膝を手前に引くと、左肩が浮くので肩の後ろに手を入れやすい！



上の図の様に手を置く。

(3) 膝を手前に倒す様に引き、左手で左肩を引く。

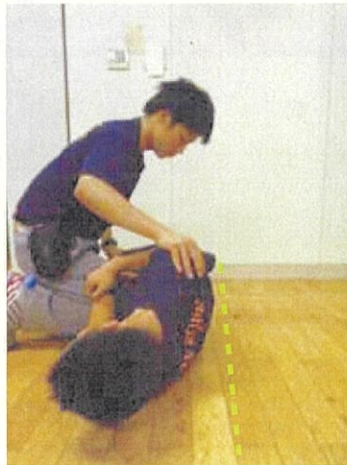
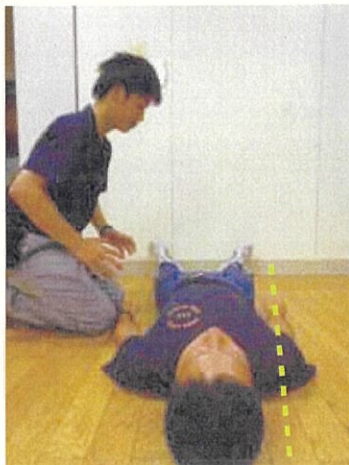


応用編①

仰臥位から側臥位を利用して要支援者の下に毛布を敷く。

(1) 側臥位にする。

※要支援者を毛布の真ん中に敷くコツは、点線をイメージするとやり易い。

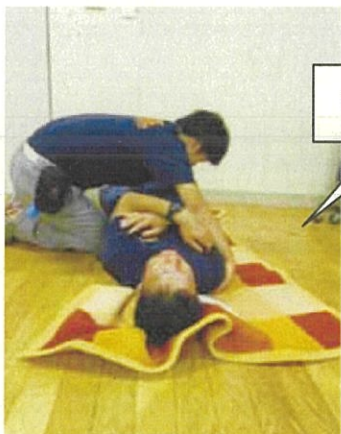


(2) 毛布を下に敷く。



毛布を要支援者
の下に入れ込む。

(3) 声かけをしながら行臥位に戻す。



背中、山を越えますよ。

(4) 手前に引っ張り毛布を広げる。



応用編②

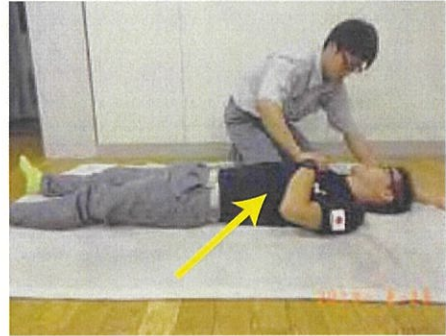
仰臥位から側臥位の方法を応用することによって、簡単に回復体位にできる。

※意識はないが十分な呼吸をしているときは、嘔吐等で窒息を防ぐため回復体位をとらせる。

(1) 右腕を上にも伸ばす



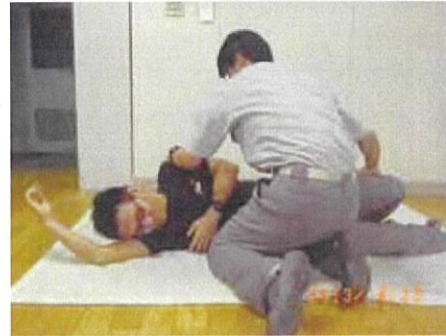
(2) 左腕を胸の上に置く。



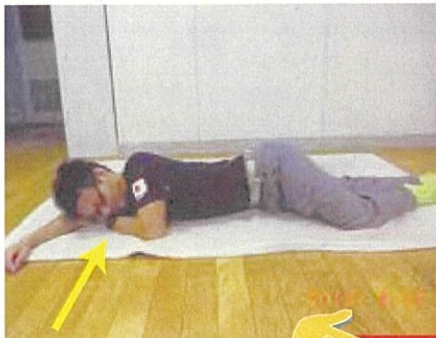
(3) 左膝を立てる。



(4) 左肩と膝を引いて側臥位にする。



(5) 左手を顔の右側に入れる。



(6) 頭を後屈させ気道確保。



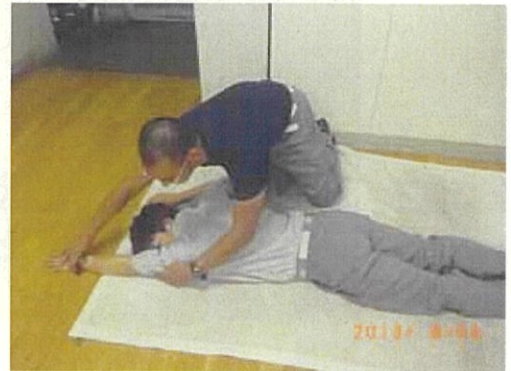
嘔吐等に注意！！

4 うつ伏せから仰向けにする方法（腹臥位から仰臥位）

(1) 倒れている人の側面に位置する。



(2) 左手を上には伸ばす。



(3) 右足を左足に乗せクロスさせる。



(4) 右手を首の後ろに乗せる。



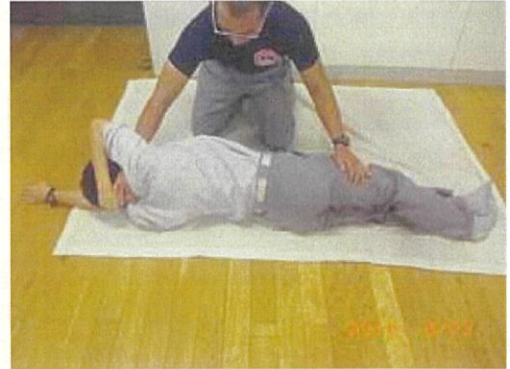
(5) 右脇の下から腕を通し、手を首に置く。



(6) 左手は右太ももの付け根付近に置く。



(7) この状態でテコの原理を利用して前に押し出すように転がす。

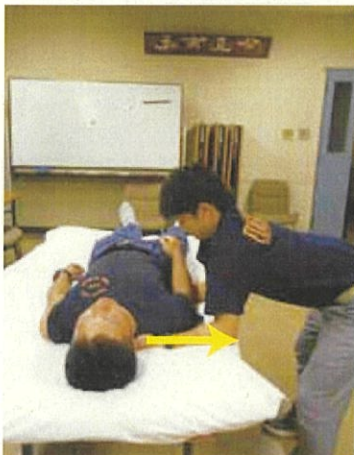


※勢いよく行くと後頭部を打つ等、怪我の原因になるので注意。



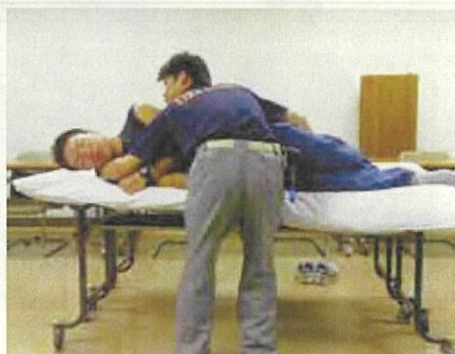
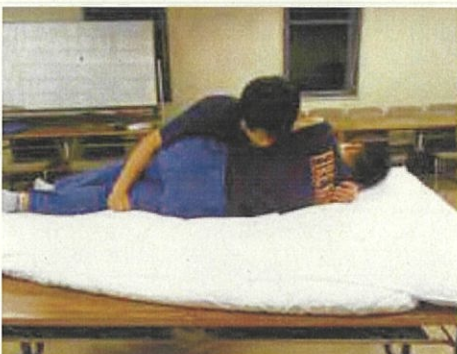
5 ベッド上で寝ている状態からベッド脇で座らす方法

- (1) 要支援者を座らす側に水平移動させる。その後、側臥位にする。
※あまり端に寄せすぎると横に向けた時に落ちる可能性があるので注意。

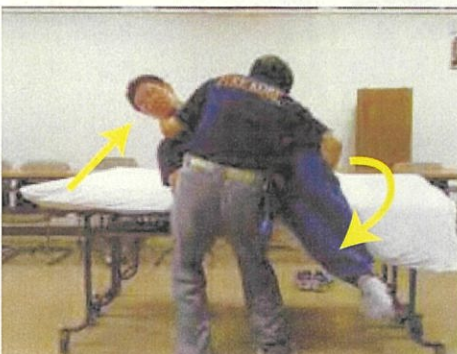


- (2) 左腕を首から通して右肩甲骨付近を支える。

- (3) 右腕は右膝裏を持つ。



- (4) 両足をベッドから落とすと同時に頭を起こす。



・嘔吐等に気をつける。

・勢いよく起こすと転落の危険があるので注意。

6 椅子から車椅子に移動させる方法

- (1) 椅子に浅く座らす。
椅子と足に空間をあける。



- (2) 車椅子をセットする。フットレスト（足置き）を椅子と足の間にに入れる。
※麻痺等がある場合は麻痺の反対側にセットする。



- (3) 要支援者の足の間に片足を入れる。（間違えないよう注意！）



・足に力が入るのであれば、左足を要支援者の右足の右側に置いて行なってもよい。

- (4) 要支援者に近づき両手で腰（ベルト）を持つ。
 その際、要支援者は介助者の後ろに手を回す。

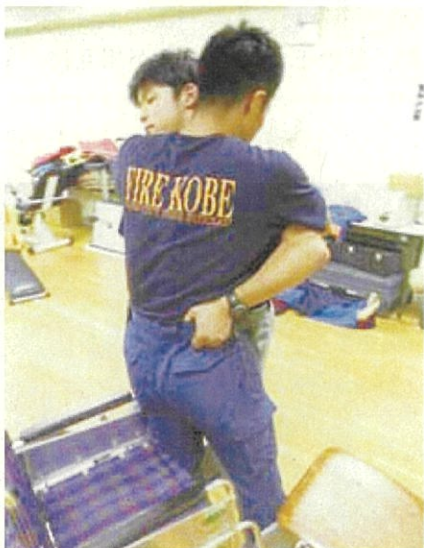


車椅子を目視しておく。

☆ポイント☆

一度お尻を下げて要介助者を前傾姿勢にしてから、引っ張る様にして立つことで負担を軽減できる。立たせるというより、補助をするといった意識で行なう。

- (5) 左足を軸にして回転させる。



- (6) ゆっくり座らせる。

※腰を曲げて行なうと、腰を痛めるので注意すること。



※この方法は椅子から車椅子に移動だけではなく、ベッド上から車椅子に移動させたりするのにも応用ができます。

災害時要援護者の垂直避難支援方法

身体が不自由な人、また、視覚や聴覚に障害のある人など何らかのハンディキャップを抱えている災害時要援護者の多くは自分一人の力では避難が困難で、周囲の支援が必要です。ここでは災害時要援護者を緊急に上階へ避難させる（垂直避難）方法等を紹介します。

訓練等の機会を通じて、防災福祉コミュニティのメンバーに災害時に特別な支援を必要とする人がいることを知ってもらい、連絡体制や支援の方法について地域内で話し合うことで実際の災害時に行動ができるようにすることも大きな目的です。また、訓練には実際に災害時要援護者の方々が参加することで、より一層効果が得られます。

☆ポイント☆

訓練の計画に際して、各区役所や自立支援協議会等関係団体にも相談することで、災害時要援護者や支援団体とのコミュニケーションや情報共有の機会ができます。

☆ポイント☆

災害時要援護者の方の特性は個人差が大きく、それぞれの状態に応じた最も効果的な方法を選択する必要があります。そのためには、まず、「声かけ」を行い、疼痛や不安感の軽減、また、支援者数や場所等を考慮し、方法を決定しましょう。

1 徒手搬送

(1) 手を組んで搬送

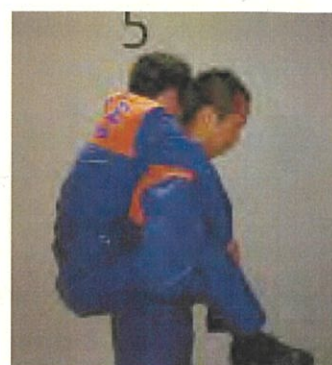
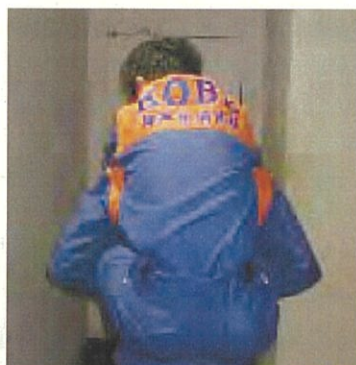
要援護者をはさんで向かい合うようにし、要援護者の足の下に支援者の手を差し入れる。

要援護者の背中に手を回し要援護者の脇の下を支え、足の下では支援者が相互に手首を握り合う。



(2) その他の徒手搬送方法

徒手搬送については、原則、支援者 2 人での搬送が望ましいが、緊急待避が必要で、かつ支援者が 1 人で要援護者の搬送をしなければならない場合は、以下のような方法で搬送する。



☆ポイント☆
支援者は災害時要援護者の両手をしっかり持ちましょう。

☆注意☆
内臓を損傷している恐れがある災害時要援護者には使用してはいけません。

道具を使った垂直避難

ここでは車椅子や毛布等の道具を活用して災害時要援護者を緊急に上階へ避難させる（垂直避難）方法等を紹介します。

現場の状況や災害時要援護者の状態によって臨機応変に対応できるよう、ここでは徒手以外の搬送方法を紹介します。

☆ポイント☆

徒手搬送時と同様に、道具を活用して搬送する際も災害時要援護者の方のそれぞれの状態に応じた最も効果的な方法を選択する必要があります。そのためには、まず、「声かけ」を行い、疼痛や不安感の軽減、また、支援者数や場所等を考慮し、方法を決定しましょう。

1 車椅子を使用した避難方法

(1) 内容

車椅子利用者又は、自力歩行が困難な人を、車椅子を使って上階へ避難させる方法で、数人で協力しながら搬送できる。

(2) 支援に必要な人数

基本 3 名以上

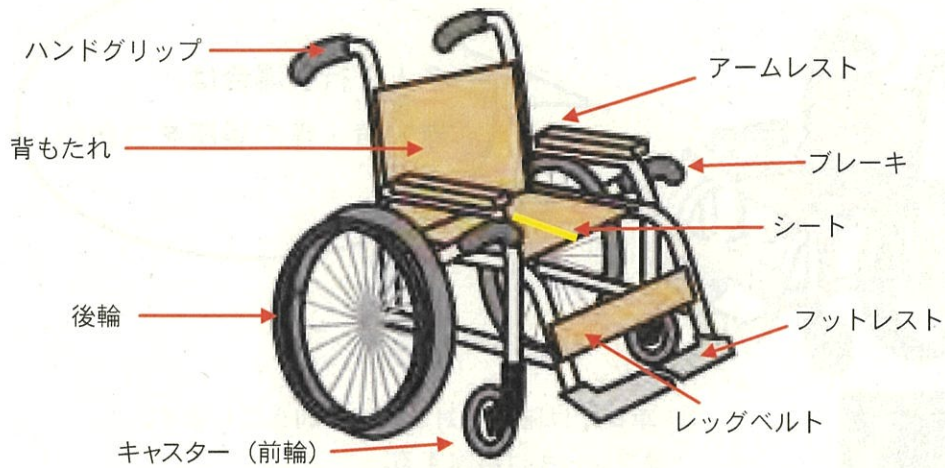
(3) 必要資機材

車椅子

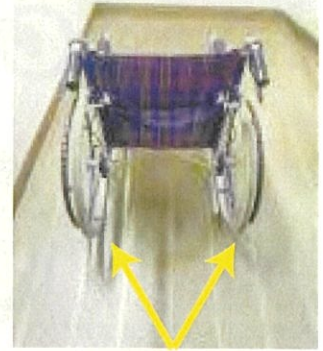
(4) 指導要領

ア 要援護者の特性について説明（関係項目参照）

イ 車椅子の構造について



車椅子後方



ステッピングバー

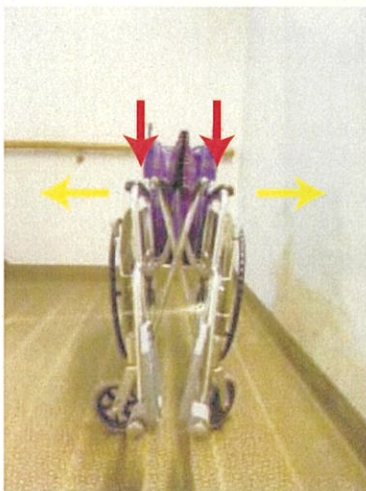
※ハンドグリップを上から押し、ステッピングバーの片方踏むことによって、楽に前輪を浮かせることができる。

収納方法

- ① ブレーキをかける。
- ② フットレストを上にした状態にする。
- ③ シートの中心線（黄色の線）部分を底から持ち上げる。

※車椅子によっては取っ手が外れたり倒れたりできる場合があります。
シートや背もたれにクッションを置いている場合は取り除きましょう。

↓ 収納後の写真（正面）



組み立て方法

- ① アームレストを持ち左右に開ける。
- ② シートの骨組みの部分を上から押さえて最後までしっかりと広げる。

※手を挟まないように注意する。



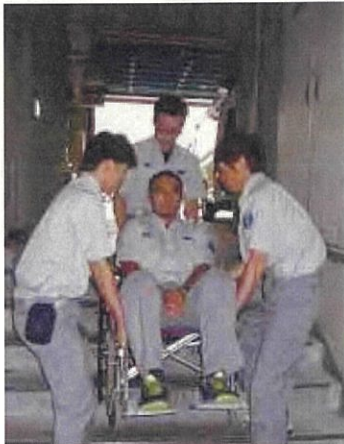
簡単であるが力任せにやってしまうと、故障の原因になります。

ウ 実施要領

① 三人での搬送方法



3人で行う場合は、
赤・黄・青の場所をつかむ。



- ① 車椅子は階段に対して後ろ向きにします。
※ブレーキは解除する。
- ② ハンドグリップ部分（青）を保持している人は腕を伸ばした状態で下半身を使い斜め後ろ方向に引っ張る様に行う。
- ③ 両サイド部分（赤・黄）を保持している人は全身の力を使い進行方向に持ち上げる様に行う。
- ④ 全員が同時に力を使い、後輪が階段にかかるように、一段ずつ引き上げる。



※両サイドの支援者が要援護者の表情を見ながら声かけを実施する。

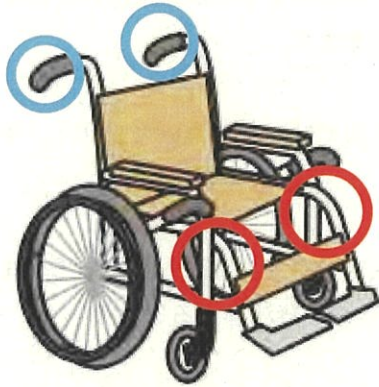


※階段角を支点にしてタイヤの動きも利用して持ち上げる。

☆ポイント☆

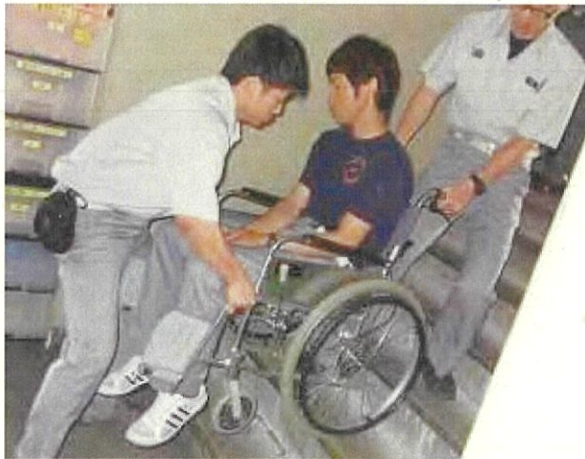
(利点) 支援者に負担が少なく、安定した状態で移動できる。女性や高齢者が加わっても可能。
(欠点) ある程度の手が必要。上階までの移動時間を要する。

②緊急時及び人数不足の場合は2人で行う。



2人で行う場合は、
赤・青の場所をつかむ。

※2人の場合は転倒・転落の危険が高いため注意。



2人で行う場合で足側を保持している人が持ち上げる際に要援護者の足が障害になる場合は、足のステップをたたんで行ってもよいが、足の骨折や麻痺等の場合はフットレスをたたまず足を乗せた状態で行う。

引き上げ方は3人法と同じ要領で行う。

※要援護者の足が宙ぶらりんになるので巻き込み等の事故に注意する。

(※訓練等で体験する場合は、2～3段でもよい。)

エ 実施時に気をつけるポイント！！

① 要援護者に声かけをする。

要援護者は自分で操作をしないので不安に思います。次に何をするかを常に声かけをすることで要援護者の不安を少しでも和らげることができます。

② 搬送は基本3人以上で行う。

緊急時を想定しているので安全面を考えると今回の方法では完璧とはいえません。事故や怪我を防ぐためにも3人以上で行う方がよい。

③ 女性や高齢者の方にも実施してもらう。

常に若い男性がいるとは限らず、女性や高齢者が実際に遭遇する場面もあると思います。
(※支援者が女性だけや高齢者だけの場合は転倒・転落に十分注意すること。)

④ 安全及び迅速に行うこと。

この方法の欠点は上階への移動時間です。いかに支援者3人が息を合わせ迅速に運べるか、上階まで上げるのに何分要するか時間を測定する訓練をすると、より現実的になる。

☆ポイント☆

今回の搬送方法はひとつの案であり、実際この方法でしなければならないわけではない。
現場の状況や要援護者の状態を確認しながら臨機応変に行うこと。

2 リュックサックを使った背負い搬送

(1) 内容

自力歩行困難な人を一人で搬送する方法でリュックサックを使うことで、おんぶより安定します。しかし、本来の用途ではない使用方法なので安易に選択することのないよう説明をする必要があります。

☆ポイント☆

緊急やむ得ない場合ですので、通常時の使用はもとより緊急時においても、支援者1名の場合の最終手段として使用してください。

また、要援護者を背負う方法なので、支援者自身が不可能と判断すれば、早急に助けを呼び、人手を確保するように努めてください。

(2) 支援に必要な人数

最低1名

(3) 必要資機材

大きめのリュックサック

【条 件】

- ・強度が十分あるもの。
- ・大きめのもの。(目安として容量40ℓ以上)
- ・脇ベルトの末端が抜け落ち防止されているもの。



(4) 指導要領

ア 搬送に適したリュックサックについて説明

- ・強度が十分あるもの。
- ・大きめのもの。(目安として容量40ℓ以上)
- ・脇ベルトの端末が抜け落ち防止されているもの。
(「必要資機材の写真参照」)

☆ポイント☆
山岳用等の強いもの、
40ℓ以上のものを推奨。

イ 実施要領

① リュックサックの脇バンドを最大限に緩める。

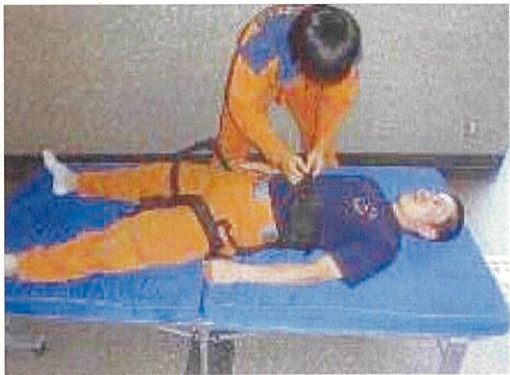


☆ポイント☆
必ず、抜けないか確認すること！

② リュックサックを逆さまにして、要援護者にはかす。

- ・腕を通すところに、脚を入れる。

☆ポイント☆
リュックサックの袋部分が、要援護者の腰以上を覆っていることを確認する。
腰バンドがあれば締める。



③ 要援護者をベッド又は椅子に座らせる。



☆ポイント☆
要援護者は、自力で座ることが困難な場合があるので、気をつける。
転倒の危険があるので、常に支える必要がある。

- ④ 支援者がリュックサックの脇バンドに腕を通す。

☆ポイント☆

この時、リュックサックが小さいと脇バンドに腕が通りにくい。



- ⑤ 要援護者に対し背負うことを告げ、《おんぶ》の体勢になる。

☆ポイント☆

支援者に負担が大きいことから、中腰以上の体制で背負うことを推奨。
リュックサックに体重をかけるのではなく、支援者に体重を預ける。
訓練時は、安全管理員をつける。

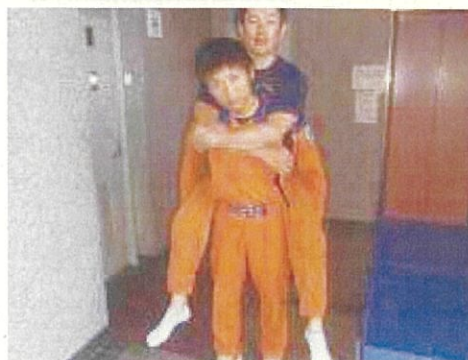


重心が高く転倒の危険あり、しっかりと安全管理を行うこと！！

- ⑥ 背負い終われば、脇バンドが肩にしっかり掛かっていることを確認し上階へ避難をする。

☆ポイント☆

支援者の肩が痛い場合は、タオル等を挟めば痛みが軽減できる。



- ⑦ 階段に手すりがあれば、リュックサックにより背負えているので、片手で手すりを持つと、より安全に階段を上ることができる。



☆ポイント☆

要援護者は、しっかりと支援者に抱きつくこと。

ウ 注意点

- ① この方法は、《おんぶ》を補助することで片手が空けられるものであり、リュックサックのみで背負うことを推奨するものではありません。
- ② 要援護者を背負うための、筋力及び体力がある方が実施してください。
- ③ 立ち上がる際、転倒する危険性がありますので、決して無理をしないでください。

3 その他の方法

(1) 毛布

(注意点)

- ・握力がいりません。
- ・毛布の端を丸めて持ちやすくする。



☆ポイント☆

椅子の姿勢にすると狭い場所でも方向転換できる。

(2) 椅子

(注意点)

- ・回転する椅子、背もたれの無い椅子は危険です。



取り組み事例の紹介

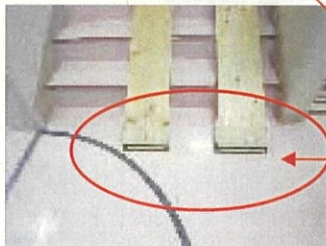
支援者の負担を考慮しながら、車椅子利用者を効率よく安全に避難させる方法について、創意工夫し積極的に津波対策に取り組んでいる事業所の事例をご紹介します。

■ 特別養護老人ホーム「須磨シニアコミュニティ」での取り組み

須磨区の沿岸部に位置する特別養護老人ホーム「須磨シニアコミュニティ」では、津波発生時に車椅子利用者をすばやく上階へ避難させるため、あらかじめ、階段の段数に見合った長さのスロープを作製しています。

(手順)

① 階段にスロープ（長い板）を設置する。

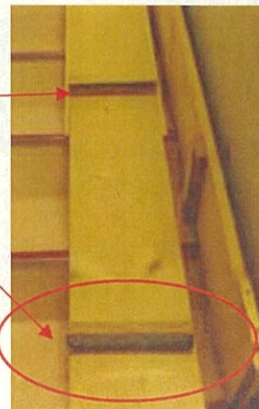
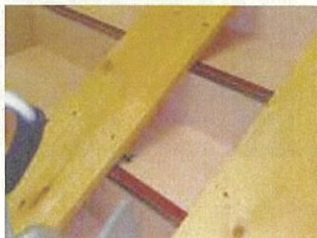


☆ポイント☆

- ・車椅子の車輪幅に合わせて板をセッティングする。
- ・あらかじめ床に印を付けておくと迅速に車椅子を板上に載せることができる。

☆ポイント☆

板の裏面は滑り止めのゴムを貼っておく。



板の裏面

② 車椅子に引き上げ用のロープを掛ける。



(上階から一人で引き上げる方法)



(上階から二人で引き上げる方法)

③ 1名（もしくは2名）の支援者が上からロープを引き、もう1名は下から車椅子を押し上げる。（注意：安全管理上、支援者は必ず2名以上とする。なお、下から車椅子を押し上げる人を必ず配置しておくこと。）





1 視覚障害

視覚障害者は災害発生時には周囲の状況を把握することが難しく、避難所や高台などの安全な場所へ一人で移動することができません。

災害時の避難では家族や近隣の人々の支援が必要であり、まずは所在と安否の確認を行って一緒に避難することが大切です。単独で避難している視覚障害者に遭遇したら、積極的に声を掛けて一緒に避難するようにします。

(1) 災害時の接し方

避難の際には支援者から名前を名のり「一緒に避難しましょう」と声を掛けて、誘導しながら避難することが大切です。避難の際には今どこを歩いているのか、どこに行けば安全なのかを説明し、周囲の状況（停電、火災、電柱や塀の倒壊、道路の亀裂等）を具体的に伝えながらあわてず落ち着いて誘導します。

ただし、津波の接近などの危険が迫っている場合は、急がないと危険である旨を伝えて迅速に行動し、安全が確保されてからそれまでの状況について説明します。



☆ポイント☆

- 周囲の状況を具体的に伝える。
- どこを歩いてどこに向うのか伝える。
- あわてない。ただし、危険が迫っているときは説明して迅速に。

(2) 防コミでの訓練実施例

アイマスクをした視覚障害者役を誘導し、津波を想定して階段や障害物の中を一緒に避難します。視覚障害者役は見えない状況での避難行動の難しさを体感し、支援者役は誘導方法を理解します。

※訓練にはできるだけ視覚障害者の方に参加してもらい、実際に誘導訓練をするのが望ましいでしょう。

【誘導の際の注意点】

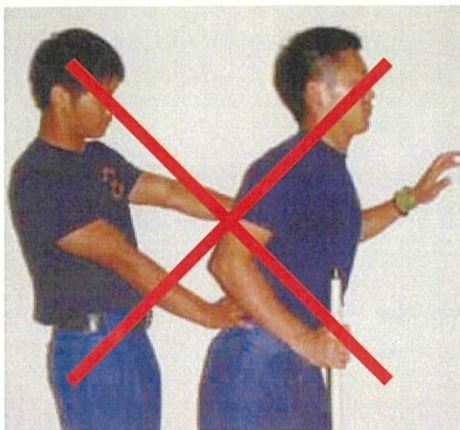
- ・どのように誘導・介助すればいいか本人に確認する。
- ・支援者の肩や肘につかまってもらい、支援者が本人の歩幅に合わせて半歩前を歩く
- ・手や白杖をひっぱらない。肩や背中を押さない。
- ・段差や障害物はよく説明する
- ・止むを得ず離れる場合は、本人の立っている場所と、どの方向に何があるかを説明し、安心してつかまっていられるものがある場所や座れる場所で離れる。



肩やひじなどにつかまってもらう



手や白杖をつかまない、ひっぱらない



肩や背中を押さない

☆ポイント☆

- 避難所まで救助する人と視覚障害者が実際に避難経路を歩いて避難する訓練を、年に1回程度しましょう。
- 避難経路はできるだけ広い道を選び、危険なブロック塀や避けた方が望ましいところは事前に確認しておきましょう。

【クロックポジションについて】

誘導の際は物体の位置や方向を表すために、時計の文字盤の数字に置き換えて説明するクロックポジションという方法が有効です。前方を12時、右を3時、左を9時として「1時の方向に～があります」等説明しながら誘導します。

(3) 災害への備え

視覚障害者の災害時の避難は周囲の手助けが欠かせません。災害発生に備えて、家族や身近な人を交え、具体的な避難方法、避難経路、避難先、連絡方法、役割分担を話し合い、日ごろから支援ができる関係作りをしましょう。

視覚障害者が単独で被災したときは、周囲の人に助けを求める必要があります。「助けて！私は目が見えないんです。」と積極的に助けを求めるように呼びかけましょう。

(4) 避難所では

視覚障害者が多少なりともしやすい場所を確保する必要があります。特にすこしでもトイレに行きやすい、壁などに接した場所を確保し、広い空間の中央部などは避けます。救援物資の配布場所やトイレには誘導するようにします。これらの事も要援護者の避難計画に盛り込むようにしましょう。

2 聴覚障害

聴覚障害者は情報とコミュニケーションにバリア（障壁）があり、災害時は聞こえないために何が起きたか状況がつかみづらく、緊急の情報から取り残されてしまいます。

災害時の避難では所在と安否の確認を行い、一緒に避難するほか正しい危険情報や避難情報をどうやって伝えるかがポイントとなります。そのためには接し方やコミュニケーションの方法を知ることが大切です。

(1) 災害時の接し方

聴覚障害者は災害時のサイレンや放送が聞こえず、特に寝ている時などは周囲の様子に気付くことができません。災害時は安否の確認を行い、身振りや簡単なメモで危険を知らせて一緒に逃げるようにします。



緊急のサイレン、放送に気付かない



身振りやメモを使って危険を知らせる

(2) 防コミでの訓練実施例

聴覚障害者は失聴した時期や育った環境によりコミュニケーションの方法（手話、筆談等）が異なります。その人に合わせた様々な「見てわかる情報」で危険情報や避難情報を伝える訓練をしましょう。また、呼ぶときは肩を叩く、明るい場所で情報を伝えるといった事にも配慮します。

※訓練にはできるだけ聴覚障害者の方に参加してもらい、実際にコミュニケーションを取ってみましょう。

【コミュニケーションの方法】

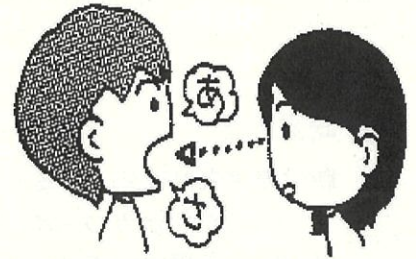
- ・手話：「津波」「逃げる」等、簡単な手話を覚えて情報を伝える。
(※すべての聴覚障害者が手話をするわけではありません。)
- ・筆談：紙や手のひらに、また空書で文字を書く。ポイントを簡潔に分かりやすく。
- ・口話：顔を見て大きな口でゆっくり話をする。(マスクは外しておく。)
表情豊かにジェスチャーを交えながら話す。
- ・携帯電話やスマートフォン：画面に文字を入力し、その画面を見せて情報を伝える。
- ・その他：身振りやイラストなどで情報を伝える。



手話「聞こえない」



筆談 (ポイントを簡潔に)



口話 (大きな口でゆっくりと)

これらの方法で情報を伝え合ったり、伝言ゲームなどを行い、言葉以外のコミュニケーションを体験してもらいます。災害が起こったときはあらゆる手段で迅速に危険情報を知らせ、一緒に逃げるようにしましょう。

【緊急時の手話】

津波が迫っている緊急の場合のため以下の手話を覚えておき、実際に津波警報が出たら一緒に避難するようにしましょう。



「津波」



「一緒に」



「逃げる」

(3) 災害への備え

聴覚障害者の災害時の避難は情報の伝達が大切です。災害が発生したら、誰が安否の確認をするのか、誰が情報を伝えて避難所まで付き添うのか、地域内で話し合うようにしましょう。

また、聴覚障害者は外見からはわかりづらい障害であるため、周囲に分かってもらえず支援を受けられないことがあります。訓練に参加した聴覚障害者の方に、災害時には「私は耳が聞こえません」という情報を自分から積極的に発信するように呼びかけましょう。

(4) 避難所では

聴覚障害者は、避難所でアナウンスが聞こえないために、食料や水の配給など必要な情報を受けられないことがあります。また、自分が聴覚障害者であることがわかってもらえず、周囲とのコミュニケーションが取れずに孤立してしまいがちです。

救援物資の配布時など、必要な情報は音声での通知に合わせて掲示板やホワイトボード等を使用して書いて知らせるようにしましょう。

【指文字を覚えましょう】

指文字は50音を指の形で表現したものです。手話の入門編として、また避難所などで、筆談する道具が無い時などに覚えておくと便利です。

あ 「a」から	い 「i」から	う 「U」から	え 「e」から	お 「O」から	は はさみの「は」	ひ ひとつの「ひ」	ふ カタカナ「フ」	へ カタカナ「へ」	ほ 船の帆の「ほ」
か 「k」から	き さつねの「き」	く 数字の「9」	け 髪「け」	こ カタカナ「コ」	ま 「m」から	み 数字の「3」	む 数字の「6」	め 「目」の「め」	も 手話の「〜も」
さ 「s」から	し 数字の「7」	す カタカナ「ス」	せ 背高の「せ」	そ それの「そ」	や 「Y」から	ゆ 音楽の「ゆ」	よ 数字の「4」	濁音 例：「ぎ」 	半濁音 例：「ぼ」
た 「t」から	ち 数字の千「チ」	つ カタカナ「ツ」	て 「手」そのもの	と 〇と〇の「と」	ら 「r」から	り カタカナ「リ」	る カタカナ「ル」	れ カタカナ「レ」	ろ カタカナ「ロ」
な 「n」から	に 数字の「2」	ぬ 手話の「盗む」	ね 木の根	の カタカナ「ノ」	わ 「w」から	を 「o」から ※手前に引く	ん カタカナ「ン」	促音・拗音 〇っ〇・〇っ〇 	長音 〇ー〇

★指文字は相手（正面）から見た図です。

ワンポイントアドバイス

聴覚障害者は老人性の難聴とは違い、補聴器の側で大きな声を出しても聞こえません。手話ができなくてもかまいませんので、正面に回って大きな口を開けて、ゆっくりと表情を付けて話すようにしましょう。

【参考文献】「聴覚障害者災害支援ハンドブック／兵庫県立聴覚障害者情報センター」

【視覚・聴覚障害者の訓練参加について（相談窓口）】

各区役所保健福祉部健康福祉課等

各区自立支援協議会

兵庫県立聴覚障害者情報センター（聴覚障害） [Tel 078-805-4175](tel:078-805-4175) [Fax 078-805-4192](tel:078-805-4192)

神戸ろうあ協会（聴覚障害） [Tel 078-371-3071](tel:078-371-3071) [Fax 078-371-3052](tel:078-371-3052)

【しあわせの村「ふれあい体験学習」】

総合福祉ゾーン「しあわせの村」では、車いすやアイマスク体験など介助・誘導のガイドヘルプなどを体験できる「ふれあい体験学習」を実施しています。

（お問い合わせ：078-743-8017）



防災福祉コミュニティ 市民指導マニュアル作成部会

奥村 芳彦
秋田 稔之
真柴 由実
大津 暢人
手塚 寛
西川 泰史
岸野 克也
前川 伸
裏井 浩一郎
寺岡 篤史
藤岡 昭浩
菅井 晶
甲斐 康之
吉田 泰介
鷲野 豊広
八尾 和彦
横田 敦史
村上 圭
大西 和哉
西田 修一

協力

学校法人 神戸滋慶学園 神戸医療福祉専門学校中央校
尾崎 万理子
由良 和也

参考文献

「聴覚障害者災害支援ハンドブック／兵庫県立聴覚障害者情報センター」

著作権は、神戸市に帰属する。

平成26年2月 製作 神戸市消防局

